

令和元年5月10日現在

機関番号：10102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K16863

研究課題名(和文)カロリング期における「記憶の管理」と統治構造の研究

研究課題名(英文) Research of the Management of "Memory" and the structure of government in the Carolingian period

研究代表者

津田 拓郎 (Tsuda, Takuro)

北海道教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：70568469

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：4年間の研究により、「トゥール・ボワティエ間の戦い」、「カピトゥラリア」、「シントペルトゥス」という3つの事例について、その「記憶」が構築され定着していく過程を明らかにすることが出来た。ここからは、実態とは異なる形で「記憶」が「神話化」し定着していくある程度共通の過程が明らかになった。我々は、こうした形で生まれた「記憶」が我々の歴史像に大きな影響を与えてしまっていることに自覚的にならなくてはならない。なお、今回明らかになったモデルがどの程度の普遍性を持つのかについての調査は今後の課題となろう。

研究成果の学術的意義や社会的意義

様々な事件や時代、人物について我々が抱いているイメージの多くは、本研究が明らかにしたような過程を通じて「神話化」された「記憶」である可能性が高いことが明らかになった。従って、我々は様々な事象を観察する際に、こうした「神話化された記憶」の存在を常に意識した上で実態把握を行う必要がある。このような知見は、歴史学一般の枠組みを超えて、社会生活を営む全ての人のびとに関わる、極めて重要な意義を持つものであるといつて良い。

研究成果の概要(英文)：Through four years of research, I was able to arrive at a clarification the construction of "memory" in three areas: "The Battle of Poitiers", "Capitularies", and "St. Simpert the Bishop of Augsburg". Through this, it becomes evident that there was to some extent a common process of mythification in the establishment of these respective "memories". In doing history, we must become conscious of how these "memories" greatly affect our historical image. Moving forward, I plan to investigate whether and to what extent this model can be universally applied.

研究分野：西欧初期中世史

キーワード：カロリング期 カピトゥラリア カール大帝 シャルルマーニュ トゥール・ボワティエ間の戦い シントペルトゥス 記憶 神話化

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

研究代表者がこれまでに行ってきたカロリング期の「集会」(王国集会・教会会議と呼ばれてきたもの)や「カピトゥラリア」の研究からは、シャルルマーニュ期とカロリング後期の間で政治的意志決定の場及びそこで用いられる文書のあり方が根本的に変化していたことが明らかになっている。集会と「カピトゥラリア」に関する伝統的なイメージは、「年次の王国集会で決定された事項が『カピトゥラリア』として文字化され、宮廷主導で複製が作成されて、国王巡察使を通じて王国全土に伝えられる」というものであったが、こうしたイメージが実体として検出されるのはカロリング後期(とりわけシャルル禿頭王時代の西フランク王国)のことであり、シャルルマーニュ期にはより場当たりの(又は「柔軟な」)形で集会や文書が活用されていたのである。

興味深いことに、カロリング後期の君主周辺に由来する史料には、彼らが行っている集会や「カピトゥラリア」の発布といった行為が、「先人たちの時代から続く慣行」であるという言説が散見される。上述の通り、こうした言説は歴史の実体とは合致しないものであり、我々の歴史認識がそれによって曇らされることがあってはならない。カロリング後期には、「集会」や「カピトゥラリア」の領域での制度化が大幅に進んだにもかかわらず、父祖の時代から統治構造が連続しているという言説が現れているという点をはっきりと認識することが重要である。こうした点が浮彫になる中で、過去の君主の統治慣行への言及を体系的に分析することが必要なのではないかとこの着想を得るに至った。そうした分析により、従来の「最盛期としてのシャルルマーニュ期」という我々の理解をも相対化し、各君主治世の統治構造の実体を分析する際の基盤をもたらしることが期待できるのである。

2. 研究の目的

本研究は、近年の中世史研究で注目を集めている「記憶の管理」という視角をカロリング期の統治構造の分析に援用し、シャルルマーニュ期を無批判に「最盛期」と捉えてきた従来の態度を見直すことを試みるものである。ルイ敬虔帝期やカロリング後期の人々が、シャルルマーニュ治世に関する情報をどの程度持っていたのか、どのようなイメージでシャルルマーニュ治世を把握していたのかを分析し、「シャルルマーニュ期の理想化・神話化」の過程を具体的に跡付けることで、従来の「最盛期」や「衰退」のイメージにとらわれることなく、カロリング期の各君主のもとでの統治構造とその変容過程を具体的に明らかにするための基盤を得ることを目的としたい。

3. 研究の方法

本研究計画は大きく分けて、1)ルイ敬虔帝期・カロリング後期の史料中で、シャルルマーニュ治世の統治構造に関する言及が見られる点を網羅的に分析する、2)ルイ敬虔帝期・カロリング後期の人々が持ちえた情報を明らかにする、3)「シャルルマーニュ治世の統治構造の理想化・神話化」の過程を明らかにするという3つの作業から成り立っている。このように「神話化された記憶」が生み出される過程を明らかにすることで、カロリング期の研究を行う際に、我々の従来の歴史像のどの部分が「神話化された記憶」の影響を受けてしまっているのかを解明することが最終目的となる。

4. 研究成果

当初の予定では、シャルルマーニュ治世の統治構造に関する「記憶の神話化」を体系的に分析することを計画していたが、初年度に先行研究の整理や調査可能なトピックの精査

を行っていった結果、「シャルルマーニュ治世の統治構造」という曖昧な対象ではなく、初期中世の特定の事件や人物についての記憶が神話化していく過程を分析する方法へと方針を転換することとなった。こうした方向転換をもたらしたきっかけは、「記憶の神話化」が先行研究上でしばしば指摘されてきた「トゥール・ポワティエ間の戦い」に関する調査である。「トゥール・ポワティエ間の戦い」に関しては、多くの先行研究がその「記憶の神話化」を指摘しつつも、「研究開始当初の背景」のところで指摘したような「1~2世代の間に急速に進む記憶の神話化」に関する調査はほとんど行われていなかったのである。

「トゥール・ポワティエ間の戦い」の研究からは、事件後1~2世代の間に「記憶の神話化」が生じる際には、当初予想されていたような「記憶の管理」による特定の人間(集団)による意図的な行いではなく、情報不足による誤解や偶然的要素が大きな役割を果たしていた可能性が高いことが明らかになった。また、こうした短期間で急速に神話化が進んだ後、中世を通じてそうした記憶が定着していく過程も明らかになった。

重要なのは、こうした「神話化」の流れが、研究代表者が以前から取り組んでいる「カピトゥラリア」について見られたものに類似している点である。そこで、「カピトゥラリア」についても、1~2世代の間に急速に進む「記憶の神話化」に加えて、中世を通じてそうした記憶が定着していく過程、さらには近世以降の過程をも射程に含めた分析を行った。その結果、両方の事例において、中世盛期~後期にかけて「神話化を経た記憶」が定着していき、近世の印刷本を通じてそうした記憶が広範囲に広められ、19世紀以降の近代歴史学においてもそうした記憶が受容されて、現在の通説的イメージにそうした「神話化を経た記憶」が入り込むという過程がある程度共通して検出された。

本研究においてはさらに、カロリング期のアウクスブルク司教で、後に守護聖人として幅広い人気を集めたシントペルトゥスについても、その「記憶の神話化」の過程を分析した。シントペルトゥスは、「カロリング朝時代の司教」としては目立った功績のない、比較的平凡な人物であったにもかかわらず、近世においてアウクスブルク司教区を越えた極めて広い範囲から巡礼者を集めることとなった守護聖人である。こうした特異な存在であるシントペルトゥスは「記憶の神話化」研究の格好の素材となる。シントペルトゥス及びその崇敬についての調査からは、生前の事跡の「神話化」が起こっていないという点は異なるものの、死後の「奇蹟」が記憶され定着していく際に偶然的要素も大きな役割を果たしている点、近世以降の印刷本を通じてそうした記憶が大規模に広まる点、神話化を経た記憶が現代の歴史叙述にまで入り込んでいる点など、上記の2例との共通点も数多く検出された。

本研究で集中的に取りあつかった3つの事例からは、実態とは異なる形で「記憶」が「神話化」し定着していくある程度共通の過程が明らかになった。我々は、こうした形で生まれた「記憶」が我々の歴史像に大きな影響を与えてしまっていることに自覚的にならなくてはならない。本研究の成果は、当初の目的であるシャルルマーニュ治世に関する記憶の神話化の在り方を探るといった狭い枠を超えて、広く歴史学一般に対して大きな意義を持つモデルケースであると位置づけられよう。ただし、今回明らかになったモデルがどの程度の普遍性を持つのかについての調査は今後の課題となる。この点については、初期中世西欧の研究者以外との連携も含めて、さらなる進展が期待される。

〔雑誌論文〕(計4件)

- (1) 津田拓郎「794年フランクフルト集会で生まれた一文書に関する『史料の歴史』とシャルルマーニュ時代の統治行為における文書利用」、『歴史学研究』第952号、歴史学研究会、pp. 25-36、2016年(依頼論文、査読無し)
- (2) 津田拓郎「トゥール・ポワティエ間の戦いの『神話化』と8世紀フランク王国における対外認識」、『西洋史学』第261号、日本西洋史学会、pp. 1-20、2016年(査読あり)(<http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/9926>)
- (3) Takuro TSUDA „War die Zeit Karls des Großen ‘die eigentliche Ära der Kapitularien’?“, *Frühmittelalterliche Studien* 49, 2015, S. 21-48(査読あり)
- (4) 津田拓郎「カロリング期の『カピトゥラリア』に関する近年の研究動向 MGH新版刊行担当者らによる近年の仕事を中心に」、『カロリング期社会変革の基礎研究。教会エリート、大所領：研究成果報告書』(研究代表者：丹下栄)、pp. 5-33、2015年(依頼原稿、査読無し)(https://researchmap.jp/?action=cv_download_main&upload_id=80940)

〔学会発表〕(計15件)

- (1) Takuro TSUDA “On the so called ‘Capitulary of Frankfurt’ and political communication under Charlemagne”, Workshop “Communication techniques and their effects in the Carolingian age”, 東京、2019年
- (2) 津田拓郎「『カール大帝の立法活動』の記憶」(シンポジウム「カロリング期の記憶」)、『西洋中世学会第10回大会』、2018年
- (3) 津田拓郎「西欧中世における『カール大帝の立法活動』の記憶と『カピトゥラリア』」、『7-10世紀西ユーラシア研究会』、2018年
- (4) 津田拓郎「中近世におけるシャルルマーニュの立法活動に対する認識の変遷」、『ドイツ史研究会』、2017年
- (5) 津田拓郎「8世紀フランク王国における対外認識 トゥール=ポワティエ間の戦いの再検討から」、『北海道教育大学史学会』、2017年
- (6) 津田拓郎「フランク王国における言語状況についての諸問題」、『7-10世紀西ユーラシア研究会』、2017年
- (7) 津田拓郎「カロリング期フランク王国における『カピトゥラリア』とは何か 西欧初期中世研究における分析概念の見直しに向けて」、『平成29年度北大史学会大会』、2017年
- (8) 津田拓郎「トゥール・ポワティエ間の戦いの記憶の神話化をめぐって」、『中国四国歴史学地理学協会2017年度大会』、2017年
- (9) 津田拓郎「シャルルマーニュの象アブル・アッパーズ：8~9世紀のフランク王国における周辺世界認識」、『7-10世紀西ユーラシア研究会』、2016年
- (10) 津田拓郎「カロリング期の統治行為における文書利用 いわゆる『フランクフルト勅令』を中心に」、『研究集会：カロリング期社会統制の諸層』、2016年
- (11) 津田拓郎「794年『フランクフルト勅令(フランクフルトカピトゥラリア)』とカロリング期の統治行為における文書利用」、『南山大学西洋史読書会』、2016年
- (12) 津田拓郎「カロリング期フランク王国史に関する『史料の歴史』 794年『フランクフルト勅令(フランクフルトカピトゥラリア)』の事例から」、『構造史研究会』、2016年
- (13) 津田拓郎「ピピン期およびシャルルマーニュ期前半における *synodus* と文書利用」、『研究集会：カロリング期社会統制の諸層』、2015年
- (14) 津田拓郎「近年の欧米学界における『レーン制』研究の動向」、『南山大学西洋史読書会』、2015年
- (15) 津田拓郎「トゥール・ポワティエ間の戦いに対する評価の変遷とその『神話化』をめぐって」、『7-10世紀西ユーラシア研究会』、2015年

〔その他〕(計2件)

(1)「読書案内:カール大帝とフランク王国」、『歴史と地理』721(世界史の研究258)、pp.54-57、2019年(<http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/10444>)

(2)「2017年の歴史学界 - 回顧と展望 - : 中世(中東欧・北欧)」、『史学雑誌』第127編第5号、史学会、pp.328-332、2018年